

# 小動物抄 草野心平



# 小動物抄



草野心平

新潮社版

小動物抄しょうどうぶつしょう

昭和五十三年十一月十日 印刷  
昭和五十三年十一月十五日 発行

定価 一〇〇円

著者 草野心平くさのしんぺい

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒102 東京都新宿区矢来町七-

業務部・(〇三)二六六―五一―

編集部・(〇三)二六六―五四―

振替 東京四一八〇八番

印刷所 株式会社三秀舎

製本所 神田加藤製本

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小  
社通信保宛御送付下さい。送料小  
社負担にてお取替えいたします。

小動物抄

5

続・小動物抄

63

旅する植物

125

石

173

装画・関野準一郎

小動物抄



小動物抄

陣陣寒い朝だった。玄と豚子を連れて東村山秋津の小徑小徑を散歩していた。徑のヘリには霜柱がたち、銀砂をまきちらしたような堅い土を踏んで私たちは歩いていった。

豚子は生後八ヶ月の玄の子供だった。玄は純粹な甲斐犬だが相棒の雄はもういい加減年とつた大きなむく犬らしかった。白毛だがうすよごれていてきたなかつた。何処の家の飼ひ犬かも分らず、細い匂いの一本道をたどってきたのだらう、のっそり私のウチの前に現われた。そのでっかい恰好が私の田舎の千之助に似ているので、その犬に千之助という綽名をつけた。

豚子が千之助の子だと思わせた理由は、白い小豚のようだったからで、父親似ということである。母親に似たら黒と茶褐の虎ぶちの筈。

玄は四匹の小犬を生んだ。三匹はもらわれていったが、豚子だけが残った。これももらい手があればあげる積りでいる。

豚子は霜柱を踏んで花の咲いてる茶畑にもぐったり、もどってきては私や玄より先っ走りして駆けてゆく。

突如、バタバタッという翅音と異常な尖んがり声がきこえた。私は走っていった。豚子が倒された鶏の上にまたがり、その翅をくわえて左右にゆすぶっていた。豚子の頭をコツンとやり

倒れてる鶏を抱きあげた。それは軍鶏<sup>シヤモ</sup>だった。裸にちかい出っ張った軍鶏<sup>シヤモ</sup>の胸からせわしい動悸が伝ってくる。二、三枚ちらばった羽をふんで突っ立ったままどうしようかと考えていた一瞬、さつき農家の庭で焚火していた老人を思い出し、いまきた径をもどって行つた。

「さあ、この辺の家ではないな」

とその老人は言つた。私は自分の家への道順を詳しく話し、名前を告げ、それまではちゃんとかくまっておきますから、飼主が分りましたらどうぞ、と言つてその家を辞した。私自身、その界限は相当知つてゐる積りだが、散歩の都度、こんな軍鶏<sup>シヤモ</sup>を見かけたことは一度もなかった。いまはベッドがおいてあるが、その頃は二面ガラス窓になつてゐるモノリエに不敢取軍鶏を放した。モノリエというのは本やその他のモノ置き場とアトリエを兼ねた積りの板の間だった。放された軍鶏は、然し胸を突き出してシャンと立った。赤いトサカ、長い頸、青黒く光る翅と尻っぽ、太い岩乗な黄色い脚、見事な蹴爪、これが豚子につかまつたなどとは思えない程の堂々とした立派さである。

私は一服し、そして考えた。考えた末スタンと名付けた。「赤と黒」からの聯想からスタンダールの上の方をもらつたのである。

それから聞もなくのことである。スタンが不思議な軍鶏であることが分つたのは。もともと鶏は人間の近くに生活している鳥だが、つかまえようとすれば素早く逃げてしまう。餌<sup>えさ</sup>をまけば直ぐ近よってくるが、またつかまえようとすれば逃げてしまう。例外は時にはあるけれども、

大体はそんな鳥である。スタンと言わば闘鶏にも使われる喧嘩鶏でもある。だから普通の鶏よりも野性的である筈なのに、一寸具合がちがつていた。私がモノリエに突つたつてると頸を殊更にのばしてこっちの顔を見上げたりする。しゃがんでも逃げようとはしない。そこで私は米粒を一トつまみもって掌をひらくとスタンは平気で米粒をついばむ。試しにダツコしてみたら、されるままになっている。まるで計算ちがいだった。

どんな人が飼主で、またどうして一羽だけで独り、あの霜柱の径を歩いていたのだろう。見当は全くつかない。こんなに馴れツコの軍鶏なんてものがあろうか、と思ひ乍ら私はモノリエと書斎の間のガラス戸をあけ放つた。机の前に胡坐をかいてると、やがてスタンはノコノコ書斎にはいつてきて、パアツと翹音をたてて机の上のにつかつた。そして、到頭私の肩の上に飛び移つたのである。それから毎日スタンと私のそんなつき合いが続いていった。

玄は南アルプス北岳の麓の村の産であつた。男っぽい名前だが、私自身玄という言葉が好きなことと武田信玄の国の生れでもあり、それに実はウチにとつては玄第二世であつた。第一世は雄だったが国立くにたちにいた頃病院で死んだ。雌ではあるが第一世の玄を襲名さしたのだった。

私自身よくは知らないけれど、甲斐犬というのは獵師がカモシカの密獵に使つたり、数匹共同で熊を追いたてたりする、からだはちっちゃいが獐猛な種類だそうである。ところがウチの第二世ときたら、見知らない子供たちにもまるで嬉しそうに尻っぱをふる。尻っぱをふるだけではたりなくて、尻を左右に踊るように動かすのである。そんなことからウチではツイストの

玄という綽名をつけてしまった。

もらわれていった三匹のうちには甲斐犬系統のもいた。豚子は図体が一番大きかったが、全体が白っぽいむく犬で鼻はピンクの色をし、そのピンクのなかに二、三点茶っぽい点がついていた。犬としたら最低の部類に属するのだろう。スタンを囓んだとはいえ、然し根は呑気で茶目で鷹揚で神経質なところはまるでなかった。

或る晩ウチに誰もいなくなるとき、玄は外の犬小屋にいたが、豚子は家の中において出掛けていった。階下のソファの上において。ところが初めての二階への階段を登りたくなつたのだろう。帰ってきた時は私のベッドにのうのうと寝ていたが、唐紙は破られ、着物はひきだされ、鏡台の化粧品なんかはそちこちにころがっていた。然しそれも豚子の茶目っぽいところで、飛びきり善良な性格であることがだんだん分ってきた。

モノリエのガラス戸をあけると直ぐ池である。色んな名前の鯉たちや草平、草太、草之介などの草魚たち、また初めは大串、中串などと呼んでいたが、それじゃ一寸気の毒なのでつる吉などと改名した鰻なども泳いでいた。

スタンを抱いて池にかかつてるちっちゃな橋を渡って芝生の庭にでた。

「豚子駄目だぞ、スタンをいじめちゃ」

こっちの眼を見て、何故そんなにおこられるのかは分らないが、おこられていることは分るらしく、スタンを庭にたたしても、かかるところか尻っぽを巻いて恐縮しているていたらくだ。

そんなことがきつかけで豚子とスタンはだんだん仲よくなつていった。朝の散歩での出来事などスッカリ忘れてしまったかのようだった。豚子が茶目つ氣を出してスタンの翅に右足でさわろうとすると、スタンは嘴で豚子の頭をコツンとやる。まるで逆な立場になつてしまった。玄はスタンなどには何の興味もないように、いつでもそっぽをむいている。

息子が東京でどんな生活をしているだろうかと思つてラビツシのおふくろがドイツからやつてきた。或いは生活が落着いたので慰労のために呼んだのかもしれない。小動物類をひどく好きな、シエンホフと三人連れだつてやつてきたことがある。芝生の庭の真ん中に黒花崗ミカゲのテーブルがあり、その傍にこれもテーブルと同じようにまっ四角の、赤煉瓦で組たてたバーベキュー用の炉がある。バーベキューという言葉はあんまり好きでないので、ウチでは天焼き場とよんでいるが、そこでビールや焼きとりの天焼きをやった。ラビツシのおふくろにはテーブルに腰かけてもらい、われわれは脚を放げだしたり胡坐をかいたりして赤煉瓦の炉をかこんだ。玄や豚子たちも当然のような積りでその周りにきていたが、スタンがトットツとやつてきて私の胡坐の膝にのつかったのを見て、おふくろさんはスットンキョウな声をたてて、笑いながら息子になにかしゃべつてゐる。ドイツ語を解らない私にはさっぱりだったが、シエンホフが英語で、まあ、ワンダフルつて言うような意味だといった。皆んなで他愛ないジョークを吐いたり、炭火でジジーツと煙をたてる串刺しの肉を頬張つたりビールで氣焰をあげたりした。

その時、一緒に飲んだり食ったりしている連中がドイツ人であることから、ふと私は癌藏のことを想い出した。前橋紅雲町五十六番地のボロ家にいたとき、一匹のブルテリアを飼っていた。その頃伊藤信吉などとガリ版刷りの詩誌「學校」を出していたが、私は自分の本名の他に北山癌藏というペンネームも使っていた。癌という病気のあることも知らなかった二十代の頃である。癌藏、そのゴツイ活字も重たい濁音も自分は好きだった。ブルテリアの頑強さに打ってつけだと思って自分のペンネームを犬にやった。

ところで貧乏は一寸した凄烈さだったので大工に犬小屋を作ってもらふ余裕はなかった。玄関の二畳の間に新聞紙を敷いて、そこを癌藏の居間にした。癌藏は新聞紙を喰いちぎり、ちぎれた紙は盛りあがり、そのなかに悠然と寝そべったりしていた。犬小屋に押しこめられるよりは畳の上の生活なのだから幾らかは人間並みということになる。ところがもともと人間並みのことがあった。犬小屋のない癌藏は食器もまた自分だけのものは与えられなかった。私たち家族が食事を終ったあと、その味噌汁鍋が癌藏の食器になるのだった。つまり循環論法でゆけば犬の食器で味噌汁をつくり、それをこっちが椀によそって食べるのである。女房はそれをひどくイヤがった。

「犬と人と同じ鍋なんて、何処の国にありますか」

その何処の国がヒントになって私はデタラメを言った。

「ドイツではネ。犬と人間の食器が同じ場合なんてまるでザラなんだ。沸騰させればなんでも

ない。流石はドイツだ。合理的だし科学的だ」

そんなことは皆んなには言わなかったが、昔のその時の会話を思い出しついニヤツと笑ってしまった。

満腹になり酔いもまわった。秋津ッ原にトワイライトが軽く沈みはじめた。シエンホフがいたずらっぽく私の横腹をつつき、

「第九を歌わない？」

といった。以前蓼科で歌いあったことを憶いだしたのだろう。

「よしやろう」

私は即座に答えた。これだけは私もどうやらドイツ語で歌えるのである。

ラビッシも歌った。おふくろは嬉しそうにきいていたが、われわれは一度では止さなかった。二度目からはおふくろも合唱にまじった。三度目を歌い終って皆んなは思わず拍手、それでその日の野宴はザ・エンドになったのだった。それから私は思いついておふくろの手をとり池の端に立った。錦鯉と交って泳いでいる肥った、横っ腹にウロコのないド黒を指し、あれ、ジャーマンカープと言った。おふくろは微笑しながらコックリした。ド黒というのは黒いドイツ鯉の意味の名前である。

或る朝、ふと気がつくと鯉魚のレンが池の中に横たわっている。死んだのである。その前の

日まではスイスイ泳いでいたのに、何故だか自分には解らなかった。タモですくいあげ池の端のコンクリートの上に横たえて私はしばらくそれを眺めていた。普通の魚だと眼玉は顔の中程か、それより上の方にあるものだが、鯪魚のつぶらな眼はずっと下の方についている。見つめているとその滑稽さがなんとも哀しかった。

もともと鯪魚にしる草魚にしる雷魚にしる、みんな原産地は中国である。太平洋戦争の頃だろうか、食糧事情の、少しでも手助けになるだろうということで、それら三種類の稚魚たちが海を渡ってくる破目になったらしい。ウチのも恐らくはその子孫なのだろう。レンはまだ十センチほどの小魚だが、うんと育てばでっかい鮪ほどの大きさになり現にレンの同胞などは揚子江なんかを悠々泳いでる筈である。

鯪などが死んだときには畑のヘリに埋めることもあるが大概は食べることにしている。埋めるよりも食べる方が死魚に対する仁義だと思うからだ。その時もどうしようかと思ったが、ふと見せてやろうと思ひ豚子と呼び、モノリエをあげスタンに庭にたたした。先ず豚子の前にレンをおくと、クンクン匂いを嗅ぎ、足裏で一寸触っただけだった。その間私はスタンをおさえていたが、手をはなすとスタンはレンに近づき、いきなり嘴を下腹に突き刺した。腹わたをひきずり出し、嘴からぶらさがった紐をカッカツと二度ほど音たてて呑みこんでしまった。実にくまそうに。他の部分は食べようとせず、しゃがんで私の方に向きかえってこっちを見た。私は感動した。

以前国立に住んでいたとき、大きな鳶の高蔵は玄關脇のモチの木に麻紐でつないでおいだが

(時には肩にのっけて買い出しなどに連れてつたこともあった。)或る日少年が半分死にかけた小さな蛇を持ってきた。見知らない少年だったが高蔵のことを知ってたらしく、これを食べさせてくれというのだった。それまでは小魚とか肉のコマギレなどを食べさせていたが、蛇は一度もなかった。その縞蛇を高蔵の止ってる枝のところに持ち上げると、蛇の頭近くを鋭い爪でガツとつかんだ。そのまま高蔵は頸を上の方に向けたままじっとしていた。何を考えているのか私には分らなかった。ことによたらつかんでる足裏で蛇の生死を計っていたのかも知れない。しばらくたってからカツと眼をひらいた高蔵は蛇の腹に嘴を突き刺し皮をひきむしり臓物をひきずりだして天上を向いて流し込むようにそれを呑んだ。スタンとちがうところは、それで終ったわけではなかった。けれども他のところをひきちぎって食べたのは、それから三時間ほどたってから。それもイヤイヤ食べるといった感じで、全部食べ終ったのは二日後だった。私がスタンの食いつぶりに感動したのは、考えてみると、どうやら共通した観念を持つてゐるからかもしれない。或いは自分の経験と符合するところがある点からだろうかとも思われる。もう四十四年前になるが私は新宿の市電角筈終点近くの裏通りで屋台のやきとり屋をやっていた。竹串で刺したグの入っているブリキの箱を風呂敷で包み、それを喉元にしばりつけ背中にしよって、当時住んでいた十二社の借家から街ン中を往復歩いた。

グには二種類あった。ガツとかフエとかレヴァとかハツなんかの豚の臓物共と鶏の腸やトサ